

# 共有情報バイアスに関する調整要因の検討

松崎 さくら

## 問題・目的

本研究の目的は、共有情報バイアスに関する調整要因を検討することであった。共有情報バイアスとは、非共有情報(集団の一部のメンバーに固有の情報)は議論されず、共有情報(集団のメンバー全員が共通して知っている限られた情報)のみが議論され、全体の情報が十分に生かされない事態を指している。共有情報バイアスは、先行研究における様々な調整要因の検討を通じて、頑健性が高い現象と見なされ(Xiao & Witherspoon, 2015)、集団レベルとしての確率論により解釈されてきた(Stasser, 1992)。これは、共有情報が、自分自身が再生できなくても、メンバーの誰かが再生することで再認できる情報であるのに対して、非共有情報は、自分自身での再生が必要であるのに加え、再生されても再認が働かない情報であり、そのために情報を知っている人数が多いほど話題に上がりやすく、共有情報ばかりが議論されているというものである。

しかし、共有情報バイアスが確率論により生じるという解釈には、2つの問題点が存在している。1つ目は、記憶の影響が考慮されていないという点である。先行研究で確認されてきた共有情報バイアスは、参加者の記憶能力や想起能力が同じで、かつ提示されたすべての情報を記憶でき、それらが独立して再生されるという前提の下に成立している。また、Stasser & Titus(1985)では、集団討議前に実施した想起課題での情報の想起率は、最も成績が良かった条件でも40%を下回っており、集団討議の段階ですでに半分以上の情報が利用不可能になっていることが示されている。これらのことから、すべての前提が満たされているとは言い難い。そのため、情報の記憶が共有情報バイアスに何らかの影響を与えている可能性がある。

2つ目は、集団レベルの確率論と個人レベルの確率論が区別されていない点である。共有情報バイアスは、集団レベルの確率論により生じるものとして解釈されてきたが、そもそも先行研究において各参加者に配布された情報の内訳は、非共有情報よりも共有情報の方が多くなっていた。そのため、各参加者の個人レベルにおいても、非共有情報よりも共有情報の方が共有される可能性が高かった。このように、集団レベルの確率論と個人レベルの確率論が区別できていないため、これについても検討を要する。

したがって、共有情報バイアスに関する調整要因のうち、研究1では記憶の影響を、研究2では個人レベルの確率論の影響を検討した。

## 方法

実験は、3名1集団で実施した。「3名の候補者(A/B/C)の中から、大学の学長に最もふさわしい人物を選ぶ」というテーマについて、隠れたプロフィール状況下における集団意思決定を行った。なお、隠れたプロフィールというのは、情報共有のメカニズムを検討する際に用いられる研究パラダイムである。そして、情報分配の偏りによって、本来優れているはずの選択肢が見かけ上劣って見える状況のことを指しており、非共有情報を共有することで、最適解を選択することができる。実験の流れは、各参加者に情報を配布し15分間で記憶させた後、各個人で各候補者についてのふさわしさをそれぞれ回答させた。その後、15分間の集団討議により、1人を選択させた。集団討議終了後は、質問紙への回答を求めた。

## 研究 1

研究 1 では、共有情報バイアスにおける記憶の影響を検討した。実験では、記憶の操作として、集団討議の際に情報を見ながら行う条件(情報手がかりあり条件)と、情報を見ずに行う条件(情報手がかりなし条件)の 2 つを設定した。その結果、いずれの条件でも、共有情報の方が非共有情報よりも長い時間議論されたことが明らかになった。このことから、記憶の影響によらず、共有情報バイアスが生じることが示唆された。しかし、研究 1 では議論時間の側面からのみの検討であったため、議論量については検討していなかった。加えて、個人レベルの確率論の影響も考慮していなかったため、集団レベルの確率論によるものか、個人レベルの確率論によるものかを区別できなかった。そのため、研究 1 で見られた事象が共有情報バイアスであると結論づけることはできない。その一方で、非共有情報は、情報手がかりあり条件の方が情報手がかりなし条件よりも議論時間が長くなっており、情報の再生にかかる負荷が軽減されたことで、非共有情報の共有が促進された可能性があり、記憶との何らかの関連があることも予測された。

## 研究 2

研究 1 を踏まえ研究 2 では、個人レベルでの情報分配の偏りに着目し、共有情報バイアスにおける個人レベルの確率論の影響を検討した。実験では、個人レベルの確率論の操作として、各個人への情報分配における共有情報:非共有情報の割合が、先行研究と同様に 3:1 である条件に加え、新たに 1:1 である条件の 2 つを設定した。なお、記憶の影響も排除するために、いずれの条件でも情報を見ながら集団討議を行った。その結果、いずれの条件でも議論時間では共有情報の方が長かった。しかしながら、議論量において、1:1 条件では、議論された情報の総数に占める割合は、非共有情報の方が共有情報よりも高かった。また、情報 1 個あたりの議論時間は共有情報の方が長かった。これらのことから、個人レベルにおける情報分配の偏りを統制しても、共有情報バイアスが見られることが明らかになった。さらに、本研究は 3 名 1 集団で実施したにもかかわらず、情報 1 個あたりの議論時間は、共有情報が非共有情報の約 1.6 倍となっていた。よって、集団レベルの確率論以外の影響を受けている可能性が考えられる。

また、個人レベルにおける情報分配の偏りを統制すると、非共有情報は共有情報よりも議論された情報に占める割合は多くなったことから、情報の再生にかかる負荷が軽減されたことで、非共有情報は共有されやすくなるとも考えられ、共有情報バイアスと記憶の間にも何らかの関連があることが推測された。

## 結論

本研究の結果から、集団討議では集団のメンバー全員が知っている情報、すなわち共有情報の方が顕在化していることが明らかになったが、先行研究で説明されてきた集団レベルの確率論や、個人レベルの確率論以外の影響によるものであると考えられる。その一方で、記憶は共有情報バイアスに何らかの影響を与えている可能性が示された。

集団討議では、集団のメンバー全員が知っている情報、すなわち共有情報の方が、話題が広がりやすく、より吟味されたと考えられる。そのため、自分しか知らない情報を提供することよりも、議論の広がりや展開、場の雰囲気に応じて情報共有を行うことが重要であると、人々が判断していると推測される。したがって、本研究において確認された共有情報バイアスは、集団レベルおよび、個人レベルでの確率論によるものというよりは、議論の展開や場を読むといったような心理により生じたものであると考えられる。

(社会心理学)